



第20号

発行 平成22年5月27日

茨城県立図書館

ボランティア協議会広報委員会

文責 黒澤 英宣

かがやき

目次

- 1 ボランティア協議会会長就任にあたり
- 2 ボランティア協議会
- 3 こども読書フェスティバル — 子ども落語体験記 —
- 4 ボランティア研修会を願みて
- 5 児童サービスボランティアの夢と希望
- 6 経験豊富なボランティアの声
- 7 大学生ボランティアの声
- 8 ボランティアの仲間を増やそう！

1 ボランティア協議会会長就任にあたり

ボランティア協議会会長 上條 哲

去る4月10日開催の本年度第1回ボランティア協議会において、会長に選任されました。これから2年間、この協議会の発展のために、ささやかな力を注いで参りたいと存じます。ボランティア各位のご支援、ご叱咤を常に賜りたくお願い申し上げます。

振り返ってみますと1947年(昭和22年)中学2年の夏、横浜市本牧の海岸に存在する古ぼけた移築兵舎での戦災孤児の生活ぶりを直視し、すぐさま応援活動に入った



のが、私のボランティア活動のスタートでした。それから63年の月日を数えます。絶えず何らかの活動を続けてまいりましたが、この図書館での児童サービス程、恵

まれた喜びを与えられたことはありません。児童サービスに仲間入りして早くも8年を数えますが、幼児、児童たちの輝く瞳の反応は、何にもたとえ様のない自然の与えてくださる宝石以上のものです。

願わないのに、後期高齢者とされ、去年

は喜寿を過ぎましたが、「10年(当年)取って68歳」を念頭にこれから2年、皆様とともに活動してまいりたいと存じます。ボランティアの皆様から私への率直なご意見、ご要望、ご叱声を願いつつ、ご挨拶といたします。

2 ボランティア協議会

私たちは「何かお役に立てるならば…」と県立図書館にボランティア登録をしました。その総数は170名にもなるそうです。私たちは個人として図書館に登録しましたが、11分野(運営委員会)ごとに分かれ、さらに実動しやすいように組み分けが行われたりして活動しています。好むと好まざるとにかかわらずそこに交わりができて、他では得られない出会いもあります。

ボランティア協議会は、ボランティア相互及びボランティアと図書館間の意思の疎通を図り、相互の連携のもとに円滑な活動を展開できるよう、各運営委員会の委員長及び副委員長等で構成されています。ここには、同じ図書館を媒体としているのに、全く違う特技や知識を持った方々が集まっています、それぞれがそれぞれの立場で図書館を見、より良い環境を作っていこうと

しています。市民の目で多角的に考えるというのは、きっといいことです。

私たちは『県立図書館〇〇ボランティア』というだけでなく『県立図書館ボランティア』という大きなボランティアグループの一員です。「かがやき」ではボランティア協議会の議事や情報の提供、各分野の紹介などお伝えしていきます。みなさんの交流の一助を担えればと思っています。

4月10日に今年度初めての協議会が開かれ、新役員が決まりましたのでお知らせします。

会長：上條 哲 (代読サービス)

副会長：黒沢 英宣 (三の丸書庫)

会計：黒沢 英宣 (三の丸書庫)

監査：木村 澄子 (三の丸書庫)

〔広報 小田部 和子〕

3 こども読書フェスティバル

— 子ども落語体験記 —

「こどもの読書週間」にちなんで、子どもに視点を置きつつ、子どもから高齢者まで幅広く参加できる事業を開催することにより、読書に親しみ、読書の喜びや楽しみを知り、主体的な読書活動ができるようにする。という趣旨のもと茨城県立図書館が主催するフェスティバルが、今年も5月5日に開催されました。

夏日になった水戸では、図書館前の三の丸広場に大勢のお客様がお見えになり、な

かなかの盛況でした。館内でもいろいろな催しがありました。



私は「子ども落語体験」のお手伝いをさせて頂きました。現役の教員Mさん、Sさ

んお二人の落語は、さすがにプロの落語家に手ほどきを受けているとのお話に違わず、「まんじゅうこわい」と「動物園」の2席で聴衆をハラハラ、ドキドキさせ、会場で、笑いがうずまきました。また、小学4年生と4歳の女の子の「壽限無壽限無 五劫のすりきれ.....」も飛び入りとは思えない達者さで、こどもの度胸と記憶力の良さにとても感心しました。

次回のフェスティバルにも落語会が企画されるのを楽しみにしています。



〔広報 土屋 純子〕

4 ボランティア研修会を顧みて

ボランティア研修会が、3月27日(土)、清水 正三氏〔茨城県社会福祉協議会 福祉のまちづくり推進部 主任推進員〕を迎え、「これからの地域に必要とされるボランティア像」というテーマで開催されました。

内容は、図書館ボランティアに限定された話ではなく、一般的なボランティアとしての考え方などを講演されました。中でも、人と人との関わり、つながりの大切さを強調されていました。配布された研修資料の中に『ボランティア活動の4原則』、『ボランティア活動10のやくそく』なるものが記載されていたので、そのまま紹介します。

『4原則』

- ①自発性
- ②無償性
- ③連帯性
- ④先駆性・開拓性

『10のやくそく』

- ①できることから始めよう
- ②無理をしないで続ける
- ③相手の立場に立って考える
- ④約束は守ろう
- ⑤活動にくぎりをつけよう
- ⑥家族や周囲の理解を得よう
- ⑦活動上の「ひみつ」を守ろう
- ⑧宗教・政治活動とは区別する

⑨金品のやりとりはやめましょう

⑩活動を通して学ぶ

誰でも、初心に戻って思考することは必要であると思います。ボランティア活動の基本的な行動基準、基礎的な考え方などについて語られました。このような講演会を、落ち着いて聞くことは、経験豊富なボランティアにあっても有意義なことであると感じました。



今回の参加者は36名であり、諸般の事情があるにせよ出席率が良いとは言えなかったのが残念でした。今後は開催時期や時間、魅力のある内容などの工夫で、より多くのボランティアが参加できる研修会が開催されることを望みます。

今後もボランティア研修会が「ボランティアとしての態度・知識・技術の向上に真に役立つ集い」であり続けられるよう、皆で研修会を盛り上げていきましょう！

〔広報 黒沢 英宣〕



5 児童サービスボランティアの夢と希望

— ボランティア活動4年半ばに —



高校3年生の9月に児童サービスボランティアを始め、早いもので4年目も半ばを過ぎようとしています。現在私は、大学4年生で幼児教育を専攻しているのですが、このボランティアを始めたのも幼児教育学科のある大学へ進学希望をしていた高校3年生の当時、子どもたちと少しでも多く接する機会を得たい、また、絵本や文章を声に出して読むことが好きで少しばかり得意だったため、自分の良さを生かしたり伸ばしたいと思ったことがきっかけでした。

ここ最近、ようやくボランティアを始めたころに比べて成長できたかな？という感じになってきました。それは、子どもたちに対して、笑顔で自然に話ができるようになってきたこと、そしてもうひとつは、手遊びを武器にして子どもたちと楽しみながら接することができるようになったことです。ボランティアを始めたばかりのころは、絵本を読むことで精一杯。何もできず、せっかく読書フェスティバルで司会するチャンスをご好意で頂くなどしても、どうすれば良いか分からなくてビクビクしているばかりでした。そして大学1年生の時、初めての保育実習を経験し、せっかくボランティアで子どもたちと触れ合っているのに何ひとつ生かしていないだけでなく、そのチャンスを無駄にしているということを実感しました。それから、少しずつですが授業でやったおもしろい手遊びなどを行うようにしたり、時にはエプロンシアターなどにも挑戦するようになった結果、段々と自信を持って子どもたちの前に出ること、自分らしい方法で読み聞かせをすることができるようになっていき、今は子どもたちと触れ合えるこのボランティアの時間がとても楽しくなりました。

しかし、まだまだ課題もあります。1つ目は、手遊びを自分ばかり楽しんでいたり、自分の好きな絵本ばかり選んでいるのでは？ということです。自分が楽しんでやることは大切ですが、もっと子どもたちが楽しめるような絵本を選んだり、手遊びも子どもが自分からやりたいと思えるような言葉がけをするなど、子ども主体であることをもっと考えていく必要があると思っています。2つ目は、もっと乳児とその保護者も楽しめる工夫をすることです。せっかく乳児を連れて保護者の方がおはなし会に興味を持って来てくださっても、まだ早いと思ってすぐに出て行ってしまいう方も多いです。赤ちゃんと絵本を楽しみたいけど、どんなものが良いのか分からないと思っている保護者の方もいらっしゃると思うので、今後は赤ちゃんが楽しめる年齢に合った乳児向けの絵本を個別に紹介するなどしていきたいと考えています。

最後になりましたが、上條さん始め第2・4日曜日班の皆さんにはボランティアを始めた当初から孫や娘のように可愛がって頂き、本当に感謝しております。また、先日の研修会で班を代表して児童サービスボランティアの皆さんの前で手遊びを発表した際には、皆さんにも喜んで頂けたり、話かけてくださったりと、大変嬉しかったです。私自身も、他の班の方々から学べることがたくさんあり、とても勉強になりました。これからも児童サービスボランティア全体でアイデアを出し合い協力しながら、1人でも多くの方におはなし会を楽しんで頂けるように日々精進していきたいです。

〔第2・4日曜班 沢辺 祐衣〕



— ボランティアを始めて —

児童サービスボランティアを始めてから、丸一年が過ぎました。それまで読み聞かせの経験は全くありませんでしたが、一緒に活動させていただいている皆さんのおかげで、とても楽しく続けています。

5月5日の「子ども読書フェスティバル」では、初めてパネルシアターにチャレンジしました。家で何度も練習をしましたが、やはり子どもたちの反応は生モノ。想定外の反応にあたふたしてしまう部分もあり

ましたが、途中で皆さんに助け舟を出していただきながら、何とかやり遂げることが出来ました。

まだまだ技術不足ですので、今後も研修会に参加したり、先輩方の作品をたくさん見て勉強しながら、いろいろな作品にチャレンジしてみたいと思っています。

よろしく願いいたします。

〔第1・3土曜日 佐藤 京子〕



— 夢と希望 —

私は今年の4月で読み聞かせのボランティアをはじめて2年目になりました。最初の半年は、ただ慣れる事と目の前の事をこなすことに精一杯でしたが、先輩方のおかげで少しずつ慣れて、さらに研修に参加することにより、読み聞かせとは子どもの前でただ本を読むだけではないということを学びました。

私は、聞いている時の子ども達のキラキラ輝く瞳といきいきとした表情をみるたびに、このボランティアをされていてよかつ

たと思います。もっと、子ども達に楽しんでもらいたいと、本の選び方や読み方、表情などを工夫するようになりました。

これからは、本が好きな子にはもちろん、普段本を読まない子でも、私が読み聞かせをすることにより、一人でも多くの子供が本に接する機会を増やし、さらには本を好きになってもらえたらいいと思います。そのためにも、私自身、さらに勉強をして、経験をつんでいきたいと思っています。

〔第1・3土曜日 吉野 望〕

— ボランティアを続けて —



私がボランティアを始めてから数カ月経ちました。だいぶ慣れてはきましたが、他の人と比べるとまだまだ勉強不足です。今回は私がボランティアを続けてきて感じたことを述べたいとおもいます。

私がボランティアを始めて驚いたことは、読み聞かせに来てくれる子どもたちが思いのほか多いということです。勿論少ない日もありますが、私は来る人数が少ないと予想していたので、すこし意外でした。中には毎週来てくれている子もいるらしいです。今は活字離れで本を読む子どもが

少なくなっていると言われていたので、幼稚園のころから本に触れているのはいいことだと思っています。そういう熱心な子がいるのはうれしいです。

また、回数を重ねるごとに、私の未熟さが目立っているような気がして、恥ずかしいです。私が所属している第2,4日曜日は絵本だけでなく、手遊び、紙芝居、マジックなどもやっています。総会では別の班の活動報告を初めてみて、とても個性的な内容で面白かったです。私は今のところ絵本しかやってなく、未だに読み方が単調にな

ってしまったり、読み聞かせに向かない本を選んでしまったりとまだまだ至らぬところがあるので、同じ班のメンバーのやり方を見て、学んでいきたいと思います。

始めてから数ヶ月たち、幼いころ読んでいたおすすめの本は読んでしまい、そろそ

ろ本を探すのが難しくなって来ましたが、私も絵本が好きなので、本を探すのも読むのも楽しんで続けていきたいとおもいます。

〔第2・4日曜班 市瀬 早紀〕



6 経験豊富なボランティアの声

— 「絵本の力」を利用して —



絵もことばも美しい絵本は、読み手も聞き手も心豊かな幸せな気持ちにしてくれます。私はこの読み聞かせのボランティアが大好きです。また、誇りを持って活動しています。魂をこめて作り上げた作家の作品を手渡す役割の私たちは、子どもたちの心に届くようどのように読み語ればいいのか。いつもこのことを、試行錯誤しながら活動しています。

幸い、児童サービスボランティアは、多くの研修を受ける機会があります。また、同じ仲間たちからも学び合うことも、大切な学習のチャンスです。委員長という大役も順に回って来ますから、中途半端な気持ちではできません。その結果、仲間どうしの絆も深まります。それに、人数も多く年齢幅もあります。若い会員たちもしっかり

と活動しています。私はボーイスカウトリーダーや青年の船育成の体験から、どんな子どもも青年も純粋で夢と希望を持っていることを知りました。チャンスがあったら、それぞれが持ついいものをどんどん伸ばしてやりたいと常々思っています。

私が活動を始めた20年前には、絵本は現在のように注目されてはいませんでした。でも、今は誰もが絵本の大切さを知っています。絵本の力を利用してどこまで子どもの心を育てられたか、みんなでこの輪を広げていけることを心から願ってやみません。そのためには、継続すること、そしてみんなで協力しあって歩み続けていきたいと思います。

〔児童サービス 西村 洋子〕



— 代読サービスのきっかけ —

そもそも、私が対面朗読をしようと思ったきっかけを作ってくれたのは叔父でした。3年前入院生活を送っていた叔父から「歎異抄」を読んで欲しいと頼まれ、週に2～3回のペースで読んでいました。「歎異抄」について全く知らない為、ただ原文と解釈文を棒読みするだけでしたのに、叔

父は凄く喜んでくれ、私は自分の日常では味わえない嬉しさを感じていました。

叔父への朗読は残念ながら3ヶ月くらいで終わってしまいましたが、その後あの時の嬉しかった時間を又味わいたいと思い、2年前に図書館に電話をして代読サービスのメンバーに入れて頂きました。漢字

勉強会や講習会に参加するたび難しさを感じますが、メンバーの方々と顔見知りになりお話をするようになって、楽しく活動出来るようになりました。そして今最大の課題は朗読の録音です。朗読録音初心者研修会を2月から4月まで全8回受けまし

たが、一人立ち出来るのはまだまだ道遠し
のようです。

〔代読サービス 人見 佳子〕



7 大学生ボランティアの声

私がこれまでの3年間の中で印象に残ったことについてまとめていこうと思います。

昨年度、社会福祉士の国家試験受験資格を得るために1ヵ月の現場実習を終えました。私の大学では、1ヵ月の実習のために、実習前の実習計画書作成から、実習後の実習報告書作成、実習報告会まで約1年の過程があります。その過程の中では、私たちが卒業後、実践力のある社会福祉士になれるようにと、先生方に熱心に指導いただきました。私は、指導を受けて、自分がどういう社会福祉士になりたいかが見えず悩むことも多かったです。悩みながら少しずつ学びを深めたように感じています。

そうした日々を過ごしていると、ともに学んでいる仲間と話したり、一緒にご飯を食べたりすることだけで、少し心が安らぐような感じがしました。ですが、たまには

気分転換も必要です。友人に誘われて大学の文化祭に遊びに行き、お笑いのライブを見に行きました。その日だけは、ライブを楽しみ、珍しい食べ物をたくさん食べ、実習や勉強のことを忘れ大いに楽しみました。誘ってくれた友人に感謝の思いでいっぱいです。

私は、今大学生活最後の春を過ごしています。今年は、例年と違い、多くはない大学での講義、就職氷河期のなかの就職活動、卒業研究の準備、国家試験の勉強など、大学生活ならではの自由とともに自分の行動に責任を持つ1年になるだろうと感じています。そして、今まで時間がないと言って、挑戦できなかったことにも取り組み、卒業する時に充実した生活であったと言えるような大学生活にしたいと思います。

〔児童サービス 渡辺 陽香〕



「創刊号」から今回の「20号」までを取り纏めてこられた黒澤広報委員長から、後任としてバトンタッチすることになりました。微力ではありますが、今日まで図書館ボランティアの先輩・諸兄弟により築き上げられてきた、すばらしい財産を引き継いで活動していきたいと考えております。

ボランティアのみなさまのご支援・ご協力を宜しく申し上げます。

〔広報 上原 富男〕

8 ボランティアの仲間を増やそう！

ボランティア活動と簡単に口にしますが、一つのボランティア活動でも持続性が不可欠です。1年、2年、3年とじっくりと活動成果を積み上げてこそ、本当にボランティア活動を続けてきた喜びを味わうことになると思います。しかしながら、月日を重ねて、無償のボランティア活動を続けていくことは、決して平凡な作業ではありません。じわりじわりとボランティア活動の相手からの反応を感じて自分の喜びとするようになれば、本物になったと自己評価しても良いのではないのでしょうか。

さて、ボランティア活動の喜びを理解できている方々をお願いしたい。

それは新しい仲間をじわりじわりと増やしていくことです。

学生ボランティアは進学、就職で必ず活動から離れていくことは当然です。高齢者も年々老化して行くことは明らかです。機会あるごとに、新規戦力を取り込んでいかななくてはボランティア活動の将来はないといえましょう。

現在でも児童サービスの個々のグループでは、超ベテランの入院手術後の長期入院見込み、癌による思いがけない長期療養

予想など想定外の事例により、担当日の活動に戦力不足をきたしている有様です。

ボランティアとしての新規参加者があっても、1年後には半分になってしまうことも通例です。残念なことですが、経験のない活動を交通費自弁で継続して行くことですから、半年もたたないうちに脱落してしまうことは、やむをえないことも申せましょう。出来るだけ所属グループの先輩たちが十二分な心配りをし、指導協力を重ねても、脱落を完全に防ぐことはできません。

したがって、絶えず、図書館事務局と協議を重ねながら、仲間を増やすことに力を注ぐことが必要となります。友人・知人のネットワークを十分に活用して、絶えず仲間作りの気配りをしていこうではありませんか。

あらためて団塊の世代の方々、すなわち若さを多分に残しており、自由な時間を持っている方々をマークして人材開拓を試みようではありませんか。

〔児童サービス 上條 哲〕

— ◆ — ◆ — 編集後記 — ◆ — ◆ —

平成 15 年 7 月 1 日創刊号を発行以来 7 年目を迎えることができました。今回、広報「かがやき」第 20 号を発行しました。

これまで、皆様方のご協力のもと、日頃の活動に役立つ情報や活動の様子などができるだけ丹念に心をこめてお伝えしてきましたが、さらに「かがやき」に対する多くの皆様からの意見・要望をお聞かせ頂きたいと願っています。

ボランティアと図書館、ボランティア相互間の「絆」をより一層深めることができるよう、「読みたい広報紙づくり」を念頭にスタッフ一同楽しくがんばります。

よろしくお祈りいたします!!



〔広報 黒澤 英宣〕